



イベント前日、出場するグループCカーの撮影が行われた。手前からトヨタ87C、ボルシエ962C、マツダ787B、ニッサンR92CP、トヨタTS010、マツダ767B、MCSクッピー。



## Time Machine Festival [タイムマシン・フェスティバル]

# 夢が現実となった一日。

## 往年の名ドライバーと伝説のマシンが富士に大集結!

日本の近代モータースポーツが始まって40年余り。その歴史を彩ったマシン460台と、往年の名ドライバー達50名近くが富士スピードウェイに集結した。かつてこれだけのマシンとドライバーが、これほどの規模で一堂に会したことがあっただろうか? しかもその伝説のドライバー達は全員が、かつて縁のあった伝説のマシンを実際にドライブしたのだ。当日集まった多く観客だけでなく日本中のレースファンにとって、それはまさに夢が現実となった一日だった。

文：中島秀之 撮影：平田 勝/佐藤正勝/阿部昌也



気温が低く肌寒い一日だったが、快晴に恵まれた富士スピードウェイ。貴重なマシンが、往年の名ドライバー達の手によって走る姿を前に、当日は多くの観客が訪れた。







(上段左から)  
影山正美/砂子塾長/荒聖治/黒澤翼/佐々木孝太/柳田真孝/星野一樹/中子修/岡田秀樹/森本晃生/ヒロ松下

(中段左から)  
長谷見昌弘/星野一義/柳田春人/高橋晴邦/清水正智/館信秀/武智俊憲/寺田陽次郎/見崎清志/星野薫/鈴木恵一/関谷正徳/高原敬武/長坂高樹/和田孝夫/松浦健

(下段左から)  
久木留博之/浅岡重輝/津々見友彦/黒澤元治/片山義美/大岩港美/細谷四方洋/多賀弘明/田村三夫/砂子義一/北原豪彦/大久保力/高橋国光/大坪善男/桑原彰/岡本安弘/真田陸明 (以上敬称略)



1969年のスパ24時間で4、5位となった、ファミリア・ロータリークーペを武智俊憲氏が運転。

マイナーツーリングカーのライバル、サニー-B110東名仕様は影山正美選手が、ヤマトシビックは佐々木孝太選手が運転。KP47スターレットも走った。

ホンダ所有のワンダー・グラントのグループAシビックは、中子修&岡田秀樹が久々にドライブした。

**あ** なたがもし自動車レースが昔から大好きで、自分が若い頃や子供の頃のレースの映像や雑誌を偶然目にすると、つい「懐かしいなあ」と当時は思い出し、まうような人だったとしたら、3月26日に富士スピードウェイに行かなくていいことを猛烈に後悔するかも知れない。ネコ・パブリッシングが初めて開催した「タイムマシン・フェスティバル」は、手前味噌だが、それほど素晴らしい、感動的なイベントだったのである。

欧米に比べ日本のモータースポーツの歴史は浅いとよく言われるが、1963年の第1回日本グランプリ以来、既に40年以上の歴史を有している。この間には、数々の名マシンやドライバーが誕生したわけだが、それらを一堂に集めて当時のレースシーンを再現しようというのが、今回のイベントの趣旨なのだ。

イベント当日は風が強く寒かったものの、富士山がクッキリと見える好天に恵まれ、460台にのぼる車両が富士スピードウェイに集合。コース上やピット、更にはパドックのクラブ・イベント会場で覇を競った。これだけでも感動的なのだが、お昼のアトラクションとして更に素晴らしい企画が用意されていた。

まず「幻の60's日本グランプリ王者登場」と題して、60年代の日本グランプリを戦った4台のマシンが登場。ボルシエ906には津々見友彦氏、いすゞR6スパイダーには浅岡重輝氏、マクラレンM6Bには高原敬武氏、そして日産R382には黒澤元治氏と、当時これらの車両を實際にドライブした方々がデモ走行を担当した。更にその後には、総勢40名以上におよぶ往

ドライバー紹介デモ走行では、往年の名ドライバーが緑のマシンを操った。第1回日本GP仕様のパブリカは、自身このレースで3位となったチーム・トヨタのキャプテン、細谷四方洋氏がドライブした。



# 往年の名ドライバーと伝説のマシンが富士に大集結

[タイムマシン・フェスティバル] 夢が現実となった一日。

## Time Machine Festival

年の名ドライバーと数名の現役ドライバーが、それぞれに縁のあるマシンに乗ってパレードを行ったのである。殆どのドライバー達が数十年ぶりに懐かしいマシンを運転されたようで、コース上はまさにタイムマシンに乗って過去のレースを見ていたかのような雰囲気包まれたのだ。

その後1978年に星野一義氏が運転して全日本王座を奪ったF2のノバ532BMWに、息子の一樹選手が乗って運転したり、かつて富士スピードウェイの看板レーサーだった富士GCが再現されたりと、この時代を知るファンには堪えられない内容の走行が次々行われた。

そして極め付けは、80年代90年代初頭に隆盛を極めた、グループCマシンによるデモ走行だ。ニッサンR92C(ドラゴ)、トヨタTS010(関谷正徳)、マツダ787B(片山義美)、マツダ767B(寺田陽次郎)、ボルシエ962C(高橋国光)、トヨタ87/88C、MGSグッピーBMW(高原敬武)が、当時のJSPCながらに富士の長いストレートを全開で疾走する姿は涙モノだった。

これまで日本のレース界は、過去の歴史にあまり敬意を払ってこなかった気がする。一時代を築いた名ドライバーやメカニックの方たちであっても、全日本格別のレースには招待もされず、その功績が評価されることも稀だったからだ。今回のイベントではこうした方々が、皆さん「楽しかった」と笑顔を見せてくださったのが印象的だった。過去の歴史に敬意を払い、未来へとその歴史を引き継ぐために、このイベントがなんらかの手助けになればいい。当日場内放送を担当した自分としても嬉しい限りだ。



**日本のモータースポーツのマシンが集結した伝説**

第1回日本グランプリに出場したマシンから、1000PSを超えるグループCがコースを疾走した。その姿に観客は魅了された。



日産R382は6.0V12DOHCエンジンを搭載するモンスターマシン。1969年の日本グランプリで優勝を飾った時のドライバー黒澤元治氏が、実に37年ぶりに富士スピードウェイでステアリングを握り、豪快な走りを見せた。



ボルシエ906は1966、67年の日本GPで、2位と優勝を記録。この日は津々見友彦氏がドライブ。

1970年登場のいすゞメベレットR6スパイダーは、当時と同じ浅岡重輝氏がドライブを担当した。



1978年の全日本F2チャンピオンマシン、ノバ532BMWを、星野一樹選手が父に替わりドライブ。

マクラレンM6BはM12仕様で日本のレースで活躍。高原敬武氏が運転したがエンジン不調に...

写真でしか見れなかったあのマシンが富士を疾走した!



7台のグループCマシンが大迫力の競演。日産R92Cは星野一義氏の手で全開走行!これが最後のデモランと言われるマツダ787Bは片山義美氏が運転。



チーム・タイサンがボルシエ962Cは、もちろん85~87年のJSPC王者、高橋国光氏が操縦。

マツダ767Bも登場し寺田陽次郎氏がドライブ。2台の甲高い4ローターサウンドが炸裂した。



1977年の富士GCシリーズに出場した国産マシン、紫電。そのレプリカを高原敬武氏が久々に運転!

1992年のル・マンで総合2位となったトヨタTS010。当時同様、関谷正徳氏がドライブを担当。